

本年度の重点	達成目標	重点的取組・指標	自己評価(中間)		自己評価(最終)		総合評価	評価・改善方策等	備考 アンケートとの関連
			状況	評価	状況	評価			
1 基礎基本の定着と思考力・判断力・表現力の伸長を目指し、学力の向上を図る。	算数科において、自分の考えを条件に合わせて書いたり、算数用語を用いて、図と言葉と式を関連付けて説明したりできる児童の割合を増やす。 【岡山県学力・学習状況調査】(令和3年度5月実施)と【村独自標準学力調査】(令和3年度12月実施)の算数科記述式問題の正答率を全国・県平均以上にする。 【説明する力】	授業において、児童が自分の考えを持ち、ノートに書く時間を確保し、それを説明する活動を取り入れる。 ★学校評価アンケート(児童)「学校の授業がわかる」の項目で肯定率80%	授業が分かると感じている児童は96.2%と昨年度同時期と比較し10%増加した。引き続き、授業の中で考えをもちノートに書く時間を確保し説明する活動を取り入れていく。説明する際、条件に合わせて算数用語・図・言葉・式を使えるようにモデルを示して模倣させたり説明の手順を示したりするなどの手立てを行う。また、学年に応じて、予習的課題を課す。	A	児童の肯定率は94.1%であった。教員が意識して、考えをもち説明する時間を確保したことで、児童の肯定率が9割を超えた。算数記述式問題では県学力調査で、4・5年ともに全国平均を超えている。村独自の学力調査では、全国平均以上は5つの学年で、超えていない学年は差を昨年より1.5ポイント縮めた。	A	A	・学力調査の結果から、5つの学年が全国平均を超えている。昨年と比較して記述できる児童の割合が増えているが、授業場面では図と言葉と式を関連付けて説明できる児童は限られている。 ・授業改善では、学年に応じた予習的課題を取り入れた授業づくりに取り組み、探究型学習やタイムマネジメントの観点から効果があった。来年度も継続して研究していきたい。	県学力調査(5月) 村標準学力調査(12月) 児童ア③
		年間9時間の「ハイチャレンジ」(4・5・6年生)や朝学習の時間に、到達度確認テスト、全国学力調査の過去問題、問題データベースの問題から、文章で答える問題(国語、算数)を課す。朝学習の時間には、タブレットドリル・問題データベースの問題等から、重点課題に沿った基礎的な問題(国語、算数)を課す。 ★アクションプランチェックシート(教員)での肯定率を90% ★タブレットドリル(児童)の正答率80%(3学期)	アクションプランチェックシート(教員)において肯定率は85.7%。昨年の村学力調査から見えた各学年の重点課題に沿った問題を朝学習で取り組んだ。ハイチャレンジを4回実施し、過去問題や到達度確認テストに取り組んだ。今後ハイチャレンジを5回実施して、朝学習では、学力調査の結果からわかる今年度の重点課題にも取り組む。	B	アクションプランチェックシート(教員)での肯定率は66.7%。目標数値には届かなかったが記述式の問題に取り組むハイチャレンジを計9回実施できた。複数教員で個別に指導したことが効果的であった。	C	B		教員ア⑦
2 自他を尊重する心の教育の充実を図る。	児童の自己有用感と主体的に課題を解決する力を高める。 【令和3年度学校評価アンケート(児童)】(令和3年度12月実施) 質問ア:自分には、よいところがあると思う。 「当てはまる」児童を50%に。 質問イ:あなたの学級では、学校生活をよくするために学級会で解決していますか。 「当てはまる」児童を40%に。 【課題を解決する力】	自己有用感を高めるため、児童一人一人のよさを認め合う活動を学年の実態に応じて行う。また、2・5年、3・4年、1・6年などの異学年交流を積極的に行い、活躍の場を設定する。(4・5・6年) ★学校評価アンケート(児童)「自分は、他の人の役に立っている」の項目で肯定率90% ★APチェックシート(教員)での「自己肯定感を高めるために、一人一人のよさを認め合う活動を行っている」「異学年交流を積極的に行っている(対象4・5・6年担任)」の項目で肯定率100%	授業や帰りの会でよいところ見つけを行った。「自分は、他の人の役に立っている」と回答した児童の割合は77.7%、教員の割合は85.7%であった。「異学年交流を積極的に行っている(対象4・5・6年担任)」の肯定率は25%であった。一人一人のよさを認め合う活動を引き続き行う。朝学習や総合の発表など異学年交流の機会を増やす。その中で、個人・学級としての成長や上の学年の児童の活躍を認めることで、自己有用感を高めていく。	C	教員アンケートで「自己肯定感を高めるために、一人一人のよさを認め合う活動を行っている」の肯定率は100%であったが、児童の肯定率は77.9%と目標には届かなかった。一人一人のよさを認め合う活動を積み重ねてきたが、感染予防で活動が制限され異学年交流の機会を増やすことができなかった。	B	B	【令和3年度学校評価アンケート(児童)】(12月実施) 質問ア:自分には、よいところがあると思う。 「当てはまる」児童は51.2% 質問イ:あなたの学級では、学校生活をよくするために学級会で解決していますか。 「当てはまる」児童は39.5%	児童ア⑪ 教員ア⑥
		児童主体の取組を推進するために、授業、総合(ふるさと元気学習)、学級活動、委員会活動等で、児童の発想を大切に、役割を与えたりできたことを承認したりして、児童が活躍する場を設定する。 ★APチェックシート(教員)での「授業、総合(ふるさと元気学習)、学級活動、委員会活動等で、児童の発想を大切に、役割を与えたりできたことを承認したりして、児童が活躍する場を設定している」の項目で肯定率90%	アクションプランチェックシート(教員)では、肯定率85.7%であった。ふるさと元気学習では教育コーディネーターと連絡を密に取り、児童の発想をもとに活動できた。交流や見学で、児童に役割を与えて活躍の場を設定することができた。学習したことを他学年や地域の方、他校へ発信する活動を取り入れ、児童に役割を与え活躍する場を設定する。事前のめあてをもたせ、事後に振り返りをして周りの人からも評価してもらうことで、自己有用感を高めていく。	B	アクションプランチェックシート(教員)では、肯定率85.7%であった。ふるさと元気学習を主体に、児童の発想を大事にし活動することができた。また、全学年で学習したこと発信をすることができた。	B	B	・どちらの質問項目も目標の数値に近く、昨年よりも10%以上高くなった。 ・令和4年度は、「自信 チャレンジ つながり」3つの力を育てるため、目的を焦点化して活動の充実を図る。 ・今後も「いじめ防止対策委員会」を定期的に開催し、いじめ未然防止に努めると共に望ましい人間関係について道徳等で考えさせる。また、新設事業として不登校対策として児童の居場所づくりを進める。	教員ア⑪
		学校や学級の課題を考える際には、その解決の方法を具体的に考え、学級会や代表委員会で交流させる。そして、実行に移すための取組を行う。 ★学校評価アンケート(児童)「自分は学校、学級の課題を見つけることができた」の項目で肯定率90%	児童の肯定的回答は77.7%。代表委員会で学校や学級のよいところや直した方がよいところを話し合っており、学級でも話し合いが進んでいる。引き続き、学級・学校の課題を見つけ話し合う活動を行い、委員会や学級の中で解決に向けて継続して取り組む。	C	児童の肯定率は77.9%であった。学級として課題を見つけ話し合っているが、個人としてはまだ十分見つけられていないと考えられる。	C	C		児童ア⑪
		西栗倉小学校いじめ問題対策基本方針に則り、いじめの未然防止、早期発見、対処がなされている。また、学校が楽しいと感じ、友達と仲良くできる。 ★学校評価アンケート(児童・保護者)で肯定率80%	校内いじめ防止対策委員会を開催し、未然防止に努めている。いじめ早期発見のためアンケートを5・10月に行い、全児童と担任が個別面談を実施した。学校は楽しいことがあると回答した児童は90.1%。楽しく遊べる友達がいると回答した児童は91.4%であった。人権旬間や人権集会で児童主体の取組を進めていく。	A	保護者アンケートより、子どもが学校生活を楽しんでいるとの回答は89.2%、学校はいじめのない仲間づくりに努めているとの回答は85.7%で昨年度より5%向上している。各クラスで身近な出来事を取り上げ、いじめ防止のために何ができるかを考えた。	A	A		児童ア⑦⑨ 保護ア⑥⑥⑦
3 自ら進んで運動に親しみ、生涯を通じて継続的に運動する能力と態度を育てる。	集会、委員会活動や学年の教科体育の中で、自発的に体を動かす習慣をつける。 【進んで運動する力】	天気の良い日には学年を超えて、外に出て遊んだりいろいろな運動に挑戦したりする。また、どの学年も県のチャレンジランキングに1種目以上参加する。 ★学校評価アンケート(児童)で肯定率80%	異学年間でも仲良く遊ぶ姿が見られるが、外遊びができていない児童は全体で48%で昨年度より20%減少した。チャレンジランキングに1学期全学年で参加した。休み時間には鉄棒、ハードル、持久走を取り入れ体力の向上に努めている。12月にはマット跳び箱週間も計画している。	C	外遊びができていない児童は全体で56.9%であった。体育委員会では、マット・跳び箱運動・縄跳びを業間・昼休み運動に位置づけて全校で取り組み、県チャレンジランキングは全学年で取り組むことができた。	B	B	体育委員会が中心となって、持久走やハードル週間、マット・跳び箱週間等を行う活動を年間計画に位置づけ、児童の運動(遊び)量の増加を図る。	児童ア⑬
4 体験学習や「ふるさと元気学習」を通して、ふるさと西栗倉を愛する心を育てる。	ふるさととの自然・産業・人を教材として、体験活動を交えて学ぶ。 【体験から学ぶ力】	「ふるさと元気学習」で意欲的に調べたり、考えたりすることができる。 ★学校評価アンケート(教師・児童)で肯定率80%	児童の肯定率は87.7%であった。ふるさと元気学習では、子どもの発想をもとに、教育コーディネーター(村)と密に連携しながら体験学習や施設訪問などを実施することができた。	A	児童、教員の肯定率はそれぞれ93%、100%であった。各学年で学習した成果を他学年、地域、他校に発表することができた。	A	A	「ふるさと元気学習」では、児童自ら課題設定・探究を行い、活動することで自分にできることを考え発信する児童の育成を図る。	児童ア⑭ 教員ア⑤
	地産地消の推進などを通して、食育の充実を図り、正しい食習慣を身につける。 【食から学ぶ力】	「食」に興味・関心をもち、自分でも健康な体をつくるために意欲を持って食事ができる。 ★学校評価アンケート(児童)で肯定率80%	「ふるさと元気給食」の実施や委員会による献立紹介等の給食指導をmeetを利用し行った。食育授業も計画的に実施することができた。「食」に興味・関心をもって給食を食べている児童は96.3%であった。	児童の肯定率は94.1%であった。生産者をつながる「ふるさと元気感謝給食」や給食時間の食材やマナーについての話を通して給食や食べ物について興味・関心を持つことができた。	A	A	日々の給食時や各学年の学級活動において食育指導を行う。また、学校栄養士が各学級で食に関する指導を行う。	児童ア⑯	